

秋の田を吹くる風のかうばしみや袖のこるにほひなるらん、按に異本に、かうばしき袖のこのとあり、印本は誤れり、又家集如覺法師、

さよ衣たちの、ひだに耳なれて袖のこなたにすがるなく也、按に、さよ衣たち野はひだといはん料の序及袖の子といはん縁語におけり、ひだは衣のひだに引板ヒダをよせ、袖のこなたは、袖の此方に袖の子と水田コナタをふくめてよせたるなり、○中ほうしごの稻は今の俗にボウズイ子と呼て、芒なき種類也、曲洧舊聞に、洛下一作稻田亦多、土人以稻之無芒者爲和尚稻、亦猶浙中人呼師婆粳其實一也とあるは、同日の談也、曲洧舊聞一卷、新安の朱弁字は少年が撰にて、知不足齋叢書中に收たり、

〔増補雅言集覽二十四〕そでのこいね 信友云、ほうしごの稻ト云ヘルハ、若狹ニテ稻穂ノ芒ノ無キ一種アルヲ坊主稻ト云ヘリ、信濃ニテモ然イフト國人イヘリ、決テコレナルベシ、サテ袖のことハ、僧ノ托鉢シ米ヲ乞アリクニ、與フル米ヲ鉢ノ子ト云フヲオモヘバ、古ハ僧ノ托鉢シテ米ヲ受ルトキ、袖ヲヒログ鉢ヲ載テ、米ヲ受ルナラヒナリケンヲ、其ヲ袖の子ト云ヒシナルベシ、太平記參考本卅三ニ、京都兵亂ニイタク荒衰ヘタル狀ヲイヒテ、飢ニノゾミタル人ノ疲レ乞スルコトヲ、道路ニ袖をひろげト云ヒ、今モ袖乞ト云フモ、其唱ノ殘レルニオモヒ合スベシ、又袖の子に引かさねト云ル引トハ、僧ニ布施ヲ配與フルヲ引ト云ヒ、又茶ヲ配與フルヲ引茶ト云フ、又饗應ニ酒杯又肴物ナド客ニ配ルヲ引ト云ヒ、引物トモ云フ、其料ノ杯ヲ引杯ト云ヒ、肴物ヲ引物ト云フナドノ引ニテ、米ヲ引カサネテ得タルサマ也、コノ意ヲエテ、稻ノタフレタルニヨミナセルナリ、

〔散木弄詞集三〕秋の田をよめる

山里はいでいこのへるたもとごに風をよめきて袖しぼるなり